

01・面接に行つたら倒れて、声が出ない奇病に冒される

前日譚『02・ご挨拶』から数時間後。
とある年の春。

五月上旬。十八時ごろ。

場所は大陸西部の中心都市……から徒歩で三十分ほど行つたところにあるミネルヴァの
屋敷内、実験室。

天気は晴れ。いつの間にか雨はやみ、室温は二十二度程度となつていて。
ミネルヴァの家はとても暖かく、心地いい。

この大陸に住むものの中でも、有数の住環境の良さである。

部屋はとても広く、主人公はその中央にいる。

そこは石でできた一見冷たい印象の部屋だが、ミネルヴァの作った魔法装置のおかげで、
快適な気温に保たれている。

S E 1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

【0—7秒ほど流して『ミネルヴァ』のセリフ】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

主人公、実験室の中央にあるベッドにあおむけで寝かされ、すやすやと寝息を立てている。

その意識はまだ夢の中にあり、ぼんやり、ふわふわとこの部屋を漂っている。

それでも、今自分がとても良い環境におり、気分よく過ごしている事はわかつた。

瞼には柔らかな陽の光が注ぎ、遠くで鳥の鳴く声が聞こえる。

だけどここは、外よりも明らかに暖かい。

かすかに緑のにおいがするのに、寝かされている場所は羽を敷き詰めたようにふかふかで。その中でまどろんだ全身が、幸福感と安心感に包まれている。

さながらここは楽園のようだ。

いつまでも寝入っていいくらいである。

——ん？　いいえ。少々お待ちになつて。

寮の部屋だつて、とてもよい場所よ。

わたしは職員でも何でもない、というかただの居候みたいなものなのに、何不自由ない生活をさせていただいて。

あの子からは『よく眠れるよう』と、ずいぶん大きなぬいぐるみまで貸してもらつていたのだから。

素晴らしさなら、あの部屋だつてまつたくもつて負けてないわ。

……あのぬいぐるみは巨大すぎて、一緒に寝るとわたしが転げ落ちるのだけれど。

主人公、寝ながらせつせと己に反論すると、寮の部屋に想いを馳せ、一人、うんうんとうなづく。

だけど、同時にこうも思う。

……けれど、あそこはずつと居てはいけなくて、少しでも早く去らねばならないようを感じていたのも確かで。

あの部屋が、わたしにはもつたいない場所であるほどに、苦しくて。

住む日が一日長くなるほどに、申し訳なくて。

どんどん気持ちがしおれていつて、苦しかったというのは、ある。

かもしだい。わね。

……だから、今は少し安心してるのは事実ね。

ようやくあの寮から卒業して、恩返しができそうなんだもの。

ああ、よかつた。

だめなわたしよ、さようなら。

これからは新しい暮らしを始めて、素敵なわたしになつてみせるわ……！

と。

こうして主人公は、よくわからない事をよくわからないままにして、突如与えられたこの幸せを享受しようとしていた。

まだ何もしていないのに、なぜか寮を出て、違う場所で立派に暮らす自分が存在しているかのような錯覚に襲われたのである。

もしも。もしもその錯覚に陥つたままでいたら。主人公はもっと楽で、衝突のない人生を送れただろう。『ミネルヴァさんの実験台』も、これにて完結だ。
しかし、それができないから主人公なのである。

認識した『なんだかおかしなもの』すべてに疑問符を突きつけないと生きていけない女だから、主人公はここに流れ着いた。

そして、流れ着いたその先でも、また同じ事を繰り返すのだ。

——んんん……？ ……もう一度お待ちになつて。変よ。
別に、まだ新しい暮らしが始まつていないし。そんな中、寮じゃない場所で寝ているのはおかしいわ。

確かにミネルヴァさんとの面接はなぜだかうまくいって、採用にはしていただけた。
けれど、今日はそこまで。

少なくとも、荷物を取りに一度は戻らなくちやいけないのだから、今日眠るところは寮のはず。

……なら、どうして、わたしは違う場所で寝ているのかしら。
いつ、こうなつたの？

ここは……どこ？

そう思つた瞬間、夢の世界にはあつさりひびが入り、現実がこちらを覗き込む。
それと目が合うなり、いきなり底が抜けて。

そのまま深い穴に落ちていくような感覚で……主人公は覚醒した。

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

【フェードインするよう聞こえる】

【非常に小さく、かすかに聞こえる程度】

●正面 30センチ

【無感情気味だが穏やかに。淡々と。】

本人としては最大限丁寧に、心を込めてしゃべっているのだが、通信相手のクロエには全くそれが伝わっていない。

ミネルヴァとしてはこのセリフに

『主人公さんは今、とても体調が悪いようです。

面接中に倒れてしまつて、正直、とても驚きました。

医療の魔女として、このまま返すわけにはいきません。

差し出がましい事だとはわかっていますが、今晚はここへ泊まつてもらつて、もう少し

経過を見させて下さい。单なる体調不良にしては、少々気になる点もありますし。

貴方も彼女と直接話したいでしようけれど、今は眠つているのでごめんなさいね。

それから、できるだけ様子を見てあげたいので、申し訳ないけれど、通信はここで切ら

せて下さい。

彼女は責任をもつて私が診ますから、安心して下さいね。

それでは、さようなら』

位の情報が詰まっているのだが、それはまったく届いていない

……ええ。

そういう訳なの。

だから、彼女はお預かりするわね。

それでは、ごきげんよう』

S E 2 ミネルヴァが通信機を置く音

【最初から最後まで流す】

【とても小さな音量で流す】

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

＼主人公＼

「……？」

S E 3 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

主人公、両目を開けると、ズキズキと重い頭で、なんとか周囲を見回す。
……で。ここは一体どこなのかしら。

この疑問に、早急に答えを見つける必要があつたからだ。
すると、少し遠くで女性の声が聞こえた。

誰かと話しているのかと思つたが、どうやら会話はそこで終わりらしい。
すぐに部屋は一度静寂に包まれ、ややあつて、ゆっくりとした足音が近づいてくる。
主人公は自然と、その足音のする方に目を向ける事となる。

SE4 ミネルヴァの足音

【最初から最後まで流す】
【だんだん近づいてくる】

【5メートルほど離れた位置から、50センチほどの距離まで近づいてくる】

「無感情氣味だが穏やかに。淡々と。

少しだけホツとしたトーンで。

感嘆の『まあ』。

本人としてはとても安堵しているのだが、主人公には全くそれが伝わっていない

……まあ

その足音を、声を、主人公は知っている。

主人公は今日『その人』に会うためにここへきて、つい先ほどまで一対一で面接を受けていたのだから。

だが今は眠りから覚めたばかりで、脳がまるで働かない。

また、夢の中ではあんなに調子がよかつたのに、今はまた元の状態に戻ってしまった。ものすごく具合が悪いのである。

ゆえに今の主人公は、夢の中での思考もほとんど忘れ、目の前のすべてを、まるで初めて見たもののかのように認識していた。

その上『その人』は、様々な意味で『ふつう』を超越している。

目があつた途端、自分の息が、いや、すべての時が止まつたように感じられるほど神秘的で。

歩き方とか、しぐさとか。そういったものが、すべて浮世離れしていて。

おまけに、服装が少々個性的すぎた。

結果、主人公がこのように思つたのも、それなりに自然な事だつたといえるだろう。

……妖、精？

薄紫の妖精みたいな女性が、わたしを覗き込んでる。

●正面 50センチ

「無感情気味だが穏やかに。淡々と。

少しだけホツとしたトーンで。

本人としてはとても安堵しているのだが、主人公には全くそれが伝わっていない)
目を覚ましたね。

おはよう」

「…………」

「主人公」

……いや、違う。

ミネルヴァさんだわ。

妖精じやなくて、人間よ。

どうしてわたし、この家で寝かされているの？

だが、主人公は意外にも、すぐに正氣に戻った。

心の中で己の頬をべちべち叩いてしやんとさせ、ものすごい勢いで記憶の土を掘り、自力でその名を掘りあてた。

思えば主人公には、このように、最初から不思議なミネルヴァ耐性があつた。

たいていの人間は、ミネルヴァのこの独特の雰囲気にのまれてしまう。

しかし、持ち前の気質によるものなのかなんなのか。なぜか主人公は、己の領域を維持する事に成功していた。

そんな奇妙な相性のよさが、主人公を少しずつ現実に戻していく。

●正面 50センチ

「ほんの少しだけ驚いた感じで。

ミネルヴァとしては『まあ、いけないわ』くらいの気持ちで驚いている。

だがその、これまでとのほんの少しの違いに、聞き手は何やら大ごとを想像してしまうようなトーンで。

実際は『もう十八時だから『おはよう』よりも『こんばんは』の方が適切だつたわね。

「私ったら、うつかりしていたわ……』という、実にずっこける内容のものである。
なのでこの後そのギヤップに、少々聞き手をガクツとさせる感じで一
あつ……。

【少し間をあけてから】

違つたわね。

【淡々と『そう、こつちよ……。こつちが正しいわ』とひとり納得している感じで。
独り言のように、今の時間帯にふさわしい挨拶を繰り返す。
なのでこれはまだ、主人公に挨拶しているわけではない】

『こんばんは』。

『こんばんは』の方が、適切な時間だつたわ。

【これまでよりも、少しだけ優しい声音で。】

ここでやつと、主人公に挨拶する。

向き直つて優しく話しかける感じで。

本人としては最大限優しく、主人公を気遣つてゐる感じなのだが、ほんの少ししか違わない。

そのせいで『対ミネルヴァレベル』がまだ1しかない主人公には違いが理解できない】
こんばんは。
気分はいかが?】

「主人公」

「……」

主人公、信じられない光景に引きつり笑いをしながら、

……こんばんは、つて。

それはつまり『こんばんは』の時間になるまで寝ていたという事よね、わたしが。面接は十六時台だったのですもの。

いつたいわたし、何をやらかしてしまったのかしら。

ごく一般的に考えて、面接を受けに来た人間は、終わつた後そこでそのまま寝かせてもらつたりなどはしないし、仮にそんな親切な職場があつたとして、寝た人間が寝るまでの経緯を忘れたりするなんてするはずがない。

……つまりわたしは、自分でもそれがいつかわからないタイミングで、倒れたって事ね。

と、見える範囲の情報をかき集めて、状況を整理しようとする。
しかし、いかんせんわかる事が少な過ぎた。
ずっと気分が悪かった事は覚えている。

それでも気を失うほどではないと思つていたが、おそらくその認識がいけなかつたのだろう。

だから主人公は血の気が引く思いで、引き続き考へる。

……どうしましよう。

もしかしたら、他にも迷惑をかけていて。

それだけでもいけない、なんとお詫びすればって感じなのに。そのせいで『助手の話はなかつた事に……』なんて言われる事になつたら。

まずいわ。それだけは、何としてでも避けないと。

どうする？ まずはどんな風に謝るべきかしら？

そうしていると、さすがに困惑が伝わつたのだろう。
ミネルヴァが代弁するかのように話し出した。

●正面 50センチ

「無感情氣味だが、多少は気遣つているのが伝わる感じで。
現在の主人公に対する、自分なりの所感を述べる。
だが、実はミネルヴァも想定外の事態に『ドキドキ』『そわそわ……』となつてゐる。

前々から気になっていた噂の女の子が、自分のところに面接に来てくれた。

それだけで心は喜びと緊張でいっぱいなのに、いざ対面したら、『噂の彼女』は自分好みのとても可愛い子だったのだから。

ミネルヴァは感性がずれにずれている。

なので、美貌については少々他人と意見の相違が起きやすい。

だが、それでも『この方に関連しては間違いないわ。間違いなく、誰がご覧になつても可愛いとおっしゃるはずよ』と感じている。

……いや、そうじやない。

主人公が好みの容姿をしている事。それはミネルヴァにとつては重大事項だが、いくらなんでも今は、今は己の好みの話はいい。

とにかく、ミネルヴァはそんな気持ちの高ぶりをどうにか抑えて面接を終えた。
と思つたら、彼女が目の前で倒れてしまつた。

本当は『一緒に働けて嬉しい』とはしやいで騒ぎたいのに、そんな事を言つている場合ではなくなつてしまつたのである。

おまけに、彼女の病状には気になる点がある。

そのため、現在ミネルヴァは、内心大混乱に陥つていた。

心の中は真っ青である。

それをどうにかとどめ、主人公の治療を最優先しなければと思うあまり、彼女は無意識

のうちにすっかりクールモードになつた。

結果、ミネルヴァの思いはほぼ伝わらない状態になつてしまつていてる
ああ……。

『なぜ、ここで寝ているのかわからない』といった顔ね。
少々記憶が曖昧になつていてるのかしら』

〈主人公〉

「…………！」

あっ。

……そう。きっとそうだわ。

〈主人公〉

「…………？」

主人公、ミネルヴァの言葉にこくこく首を上下させてうなずくが、同時に発そうとした
言葉は、なぜか声にならなかつた。

息を吸おうとしたら喉が詰まつて、話そうとしても、うまく音にならなかつたのだ。

まるで『寝て起きたら、ちょっと風邪をひいていて、声が出せなかつた』の、ずいぶん重症版のような感じだ。

とりあえず意志は伝わつたからいい。

……だが、自分は一体どうしてしまつたのだろう？

●正面 50センチ

「淡々と、だが丁寧に。

無感情気味だが、多少は気遣つているのが伝わる感じで。

まずは主人公が現在に至るまでについて説明する】

貴方はね。

私との面接の後、契約のお話をしている時に倒れたの。
だから、しばらくここで休んで頑いでいたのよ。

【無感情気味だが、少し緊張した面持ちで。

そのために、普段よりも少しゆっくり目に、少しずつ話す。

ミネルヴァとしては、ものすごく、ものすごく緊張している。

また、自分としても尋ねにくいし、主人公としても答えにくいだろう事を、勇気を出して聞いている。

だがむろん、主人公には全くそれが伝わっていない】

あの……それで。

『できれば』で、よいのだけど。

今の容態を、ご自分で話す事はできるかしら』

「主人公」

「……？」

主人公、ミネルヴァの言葉に一気に嫌な予感がし始めて、いよいよ表情筋までもが半笑いで固まつた。

だつて……この聞き方では、まるで、自分で話せない可能性があるみたいではないか。

もしかして、わたし……。

主人公はそう思いつつも、己を奮い立たせて。

でも内心では恐る恐る、こわごわと……こう発言しようとした。

“もちろん、言えますよ。大丈夫です。

というかわたし、ずいぶんご迷惑をおかけしたようで……”

〈主人公〉

「…………。」

「…………？」

しかし、それはうまくいかなかつた。

からうじて声のようなものは出せたものの、それは極端に小さい。

ミネルヴァどころか、自分の耳にもほとんど届かない、か弱いものだつたのだ。

だが、ミネルヴァの声や周囲の音は、しつかり主人公にも聞こえている。
だから、耳の異常でない事は間違いない。

それでは、これは、やはり――――――。

〈主人公〉

「…………？」

「…………。…………！」

とたんに焦り、困惑する主人公を、ミネルヴァが申し訳なさそうに見下ろしている。

主人公の体調が悪いのは、今に始まつた事ではない。

だから、どう考へてもミネルヴァのせいではないはずだ。

それなのに、なぜか彼女はそうしていた。

その『なんだか申し訳なさそうだ』という印象は、主人公の心に妙に残る。

●正面 50センチ

「〔※息遣いのみ※〕で表現する。

静かに息をのむ。

明らかに主人公は声を出そうとしている。

なのに、まるでそれができていないのが見て取れたので

……。

【無感情気味だが、少し心配そうに。】

ミネルヴァはすでに、主人公が疫病に冒されている事に気づいている。

だが、まさかここまで進行が早いとは思っていなかつたので。

なので、内心はものすごく心配している。『どうしましよう。……やはりそうだつたのね。

どうしましよう……！』と、青くなっている。

だが、医師として、慌てたり、混乱したりする事で主人公を不安にさせてはいけない。

そんな思いによりクールモードになり（省略）主人公に想いが伝わらなくなつている】

ああ……やつぱり。

進行が思つたより早いわ。

それだけ重いのね。

【できるだけ元のトーンに戻そうとして。

主人公を必要以上に不安にさせてはいけないと思ったので。

医療の魔女として、それはよくないと思つたので。

そのため、ミネルヴァとしては非常に気遣つて接しているのだが、主人公には、やはり、
ほとんど違いが判らない】

……それでも、意識が戻つたのは良（よ）い事だわ。

仕方がないけれど、早速診（み）始めた方がいいかも知れない。

契約書のサインは頂いている事だし】

……契約書？ サイン？

『早速診始める』？

ん？……？ 何の事かしら。

だが、ミネルヴァの不思議な態度について尋ねる前に、新たな疑問が主人公を襲つた。
『契約書』『サイン』。

いずれも、またずいぶんとずつしり来る単語である。

いすれにせよ、主人公はそんなものを見たり、書いたりした覚えはない。だから無関係だし、始めるものもないのだが。

いや。あつた、かも……？

●正面 50センチ

「優しく『ん？』何か気になる事があるようね」と言っている感じで】
ん？

【無感情気味だが、多少は気遣っているのが伝わる感じで。
ミネルヴァは、主人公が今『ご指摘の通り、自分は今話せないようだ』と伝えようと
しているのだろうと判断して話している。

実際の主人公は『契約書？ サイン？ 何の事？』と訴えているのだが、ミネルヴァは
全く気付いていない】

ええ。

わかっているわ。貴方の身体の事は。

【ここから穏やかで、気遣っている雰囲気はあるが断言口調で。
語尾は疑問形にならない。

ミネルヴァは主人公の症状に思い当たる部分があるので】
思うようには話す事ができないのでしよう。

だから……今も声を発せない。

正確には、とても小さな声で話すのが、やっとよね。

【ここでは『同意を求める』意味で話しているが、それでも語尾は上げない。
確信をもつて発言しているので】

そうでしょう】

〈主人公〉

「……！」

と、主人公が、書いたのか書いていないのか覚えてない契約書とサインの件について、
また記憶の地層をざくざくやつていると。

ミネルヴァは『主人公は、声が出ない事に対しても困っているようだ』と解釈したようだ。
それは違うのだが、指摘 자체はすべて正しい。

主人公は先ほどからずっと一生懸命発言しているのだが、やっぱり音量が小さすぎるの
である。

●正面 50センチ

「優しく、主人公の混乱を『貴方の気持ちはわかるわ』と肯定するようにな……うん。

【優しく、一つ一つぽつぽつと言う。

自分の説明が頭に入りやすいように、主人公がその間、いつでも発言しやすいようにしたいので。

無感情気味だが、心配そうにしているのが伝わる感じで。

ミネルヴァは主人公の噂を聞いてから、主人公の事をさぞパワフルで、エネルギーのあり余つた、悪に決して屈さない、困難をものともしない女性なのだろうと想像していた。

きっと所長もワンパン、見事なKO勝ちをしたのだろうと思つていた。

ミネルヴァの中で、主人公はちょっとしたアイドルだつたからだ。

だが、実際に出会つた主人公は、思つていたよりもずっと小さく細く、そして身体が強くもなかつた。

なのでミネルヴァは、想像と現実のギャップの大きさに驚いた。

だが、すぐに『よく考えれば、そんなのは当然の事だわ。『あの』所長と対峙するなんて、怖いに決まつている。その後もストレスに悩まされ続けて当然でしようし、そもそも魔法薬師の女性が屈強な身体をしている事が珍しい。……ああ、私は、今回も想像力が足りなかつたみたい……』と気づき、シュンとしてもいる。

そのため、自分なりに頭をフル稼働させ、考えられる症状と、想像できる精神状態を、優しく丁寧に説明している

突然こんな事になつてしまつて、驚いているわよね。

……でも、心当たりはきっとあるはず。

たとえば、疲労。

過度のストレス。

そして、睡眠不足。

そうね……。

『苦しくて眠れない程悩む日が、しばらく続いていた』

『長期に渡つて、精神的によいとは言えない状況にあつた』

そういう事があったのではないかと、私は推測しています。

……辛かつたでしよう』

主人公、図星をつかれていよいよ全身をこわばらせながらも、ふるふると首を振る。

——いいえ、そんなまさか。

ありえないわ。

わたしは、無職よ。

一ヶ月もろくに何もせず、ただ怠惰に暮らしていたんです。

そりやあ、何もしないのはいけないと思つて、クロエの家の手伝いはしていましたけれど。

……それだつて、アルバイト未満の作業量だし。実際ただの自己満足で、何の役にも立つてやしない。

夜だつてどう過ごしたらいいかわからなくて、今後受けるはずだつた試験の参考書とかがものすごくむなしく感じられて。勉強しても何も身に付かないまま時間が過ぎていく気がして。

心配したあの子が、しょっちゅう会いに来てくれてて。

こうなつたのは全部自分の責任なのに、何も悪くない彼女の時間を奪つて、悲しませて。

『こんなわたしなら、いつそどこかに消えてしまいたい』

そんな事を考へる事もありましたが。

まさか、病むほどではないでしよう。

あなたが思うような事なんて一つもない。わたしは大丈夫です。

そう言いたいが、うまく発話できなまま、何とか否定しようとした。

事実主人公には、十分すぎるほどの心当たりがあり、またもすべてはミネルヴァの指摘通りと言えた。

だが主人公には、そのせいで新雇用主にまで迷惑をかけそうになつてゐる事の方がよほどショックだつたし、それゆえに冷静な判断を下す事が出来なかつたのだ。

主人公は泣きそうだつた。もう、どこでもいいから穴を掘つて埋まりたかつた。もうとつくに落ちた後で、ここが奈落の氣もするが、それでももつと奥深くへ消えたかつた。とにかく、自分という女の至らなさを本氣で嫌悪し、隠したかつたのだ。

〈主人公〉

「……」

●正面 50センチ

「ゆっくり、淡々と、ぽっぽつと。

無感情気味だが、多少は気遣つてゐるのが伝わる感じで。

不器用なりに、最大限、自分の語彙をフル稼働して、優しい言葉をかけてゐるので。

ミネルヴァは今、これまで主人公に対して勝手な想像を膨らませるばかりで、実像とはまるで違う像を結んでいた事を深く恥じ、申し訳なく思つてゐる。

そのため、こうして直接対面し、コミュニケーションがとれるようになつたからには、

もう二度と同じ失敗をするまいと思つてゐる。

つまりミネルヴァは、主人公に最大限優しくしたいのだ。

今度こそ、その人柄を正しく理解した上で、よい関係を築きたいのであるよし、よし。

……けれど、もう大丈夫よ。

私がついているわ。

決して病魔の思うようにはさせない。

貴方の回復を保障します。

【少し自信なさげに、だが、主人公を安心させようと真剣に。

もう、治療方針の話を始めている。

ミネルヴァは話が飛びやすいので。

主人公はまだ何の説明も受けておらず、何の判断をさせられるかもわからないのに、気が急いでいて、その話をしている。

【それはミネルヴァなりに真摯に接している証拠なのだが、とにかく説明不足なのである】
勿論、最終的には貴方の判断に委ねるけれど……。
どうか、私に任せて】

〈主人公〉

「……はい……？」

そんな主人公に、ミネルヴァはどこまでも優しい。

だが、今の主人公には、彼女の厚意を素直に受け取る余裕は残されていなかつた。
また、自分はまだ何も言つていないので、まずは治療する方向で話がまとまつてゐる気がして、混乱していた。

だから主人公は、ミネルヴァのその言葉に、困惑と嬉しさが入り混じつたまま、ひとまずうなづく。

なぜなら主人公は今、ここまで言われてなお『自分は大丈夫だ』『多少の問題はあるが、このまま自力で帰れる』と、本気で思つてゐる。

そして、これを押し通そうとしている。

なのに、ミネルヴァがどんどん話を大きくしてゐるように思えて、ちよつと弱つていたのだ。

もし。もし、これについて主人公が意地を張り通し『自分は健康だ』と主張できたのなら、また違つた展開もあつた事だらう。

だが主人公は、どうしても冷静になつてしまふ。

なぜならミネルヴァは、誰もが認める高名な魔女だ。

そんな彼女にこうも心配されるという事は、わたしつてやつぱり、結構な重症なのではないかしら。

……といふか。

間違ひなく、そうなのでしょうね……。

と、理解し始めてしまつたのである。

（主人公）

「……えつと、その……」

だけど、それでも。わたしは――――。

主人公の瞳が、言いたくても言えない言葉で揺れる。
か細い声で、なんとか話し出そうとする。

それをミネルヴアは、また違つたように解釈する。

●正面 50センチ

「静かだが、ハツと気づいたようだ。

だが、ハツとしていても、どこかおつとりしているというか、マイペースな感じで。
まずは謝罪する。

無感情気味だが、多少は気遣っているのが伝わる感じで。

ミネルヴァは主人公が『治療してもらうのは構わないが、そもそも自分が何の病なのか、そこからしてわからない』と思つてているのだと解釈しているので。

実際の主人公は『そもそも、治療をしてもらうつもりはない。そこまで迷惑はかけられない』と考えているのだが、それについては全く気付いていない

あ……。

……ごめんなさい。

私つたら、また説明が足りなかつたみたいね』

〈主人公〉

「…………？」

こうなると、主人公は当事者なのに置いてきぼりだ。

先程挨拶してもらった時も思つたが、この魔女は急に話が飛んだり、突然まるで違う話題を挟み込んできたり。

かと思えば過去の話題を再登場させたりして、とにかく話の行き来が激しい。

それらは、彼女の中ではつながつてているのだろう。

だが今の、体調不良により実質休止状態の主人公の脳では、とてもついていけない。

『ミネルヴァは、今、何についての説明が足りないと思っているのか』
そこからして、今はわからないのである。

●正面 50センチ

「【わざかにしゅんとしている様子で。

しかし、真摯に説明しているつもりなのに、独り言のようになってしまいます。

己の傾向や、過去叱られた事について述べている。

ミネルヴァはかつて、助手として働いていた女性に、このような事を言われた事があるので】

昔言われたの……『お前の話は、順序を飛ばし過ぎていて、よくわからない』って。
【少し声が明るくなつて。

本人としては『キリッ』と気を取り直しているので。

ミネルヴァはシュンとなつても、基本的には引きずらない。

意外とすぐ元に戻る。メンタルが強いのである】

……だから、やり直し。

今度は結論から言うわ。

【少し間を開けてから。

一つ一つ丁寧に。

少し真面目なトーンになつて。

これは真剣に伝えなくてはならない事なので】

……あのね。

大事な事だから、よく聞いて頂戴。

……貴方の身体は今、未知の奇病に冒されています】

〈主人公〉

「！」

今度は、きっぱりと言い切る口調だつた。

これで主人公はもう『大丈夫だから』と口をはさむ隙もなくなる。

彼女の言葉に、ただただ息をのむばかりだ。

そんな主人公を、ミネルヴァは申し訳なさそうに見つめながら、続けた。

●正面 50センチ

「真面目なトーンで、淡々と。

ミネルヴァは今、とても反省している。

そのため、ミネルヴァにしては珍しく、情報が足りている。

『主人公は記憶があいまいらしいので、面接の時に話した事も、もう一度話そう。そして改めて同意を取ろう』と思つてゐる」

私の目的は、この病（やまい）の治療法を確立する事。

その為に助手を募集し、貴方をここへお呼びしました。

そして、先程の面接を経て。

『一月（ひとつき）の間、ここに住み込みで働いて下さい』とお願いしたの』

（主人公）

「……はい」

●正面 50センチ

「少し申し訳なさそうに。

一つ一つ丁寧に。

治療のためとはいえ、面接時との説明とは異なる業務になりそうなので。

またこのセリフにおいて、『今だけ』『今の私』というのはとても重要な情報である。

だが、特に強調せず、さらつと話す

本当なら……貴方の仕事は、明日から。

貴方には、私が今だけ保有する力を使いながら、少しずつ実験の協力をして頂くつもり

だつた。

けれど、事情が変わつた。

だから……もし。

貴方さえ許してくれるなら。

私はまず、貴方の治療から始めたいと思つています。

……今の私なら、それができるから

……?

えーっと。

それは、つまり。その『奇病』だかの治療法は、現在確立されていない。
だからミネルヴァは現状を変えるべく、わたしを実験の助手として雇つた。
……うんうん、ここまでわかつているの。

何やらおかしな病気が蔓延し始めている事はわたしやクロエでも知つてゐるし、求人票
にもそう書いてあつた。わたし自身、そういう仕事だと理解した上で応募したのだから、
そこはかまわないわ。

けれど、『今』のミネルヴァであれば、限定的に特別な治療ができる。
それを用いれば、わたしを治せる……?

と、いう事かしら。

——信じられない。そんな事が可能なの？

主人公、ミネルヴァが言っている事を自分なりにかみ砕きつつも信じ切れず、ただただぽかんと彼女を見上げる。

彼女なりに、誠意を持つて話してくれている事はわかる。
だが、それでも不可解な点があつたからだ。

●正面 50セント

「少し自信なさそうに、少し歯切れ悪く。

主人公の事を、ミネルヴァなりに最大限気遣っている様子で。
ミネルヴァとしては、これからする提案こそが最善だと思つていて。
だが、それが主人公に承認されるかというと、そうとは思えないのでも……」

しかしミネルヴァは、黙っている主人公を見て『特に質問はないらしい』と判断したようだ。

そのまま次の話を始めようと……だが、それにしては歯切れ悪そうにしている。

だけど主人公は、不思議とそれを嫌だとか、困るだとかは思わなかつた。

主人公はミネルヴァの事を、どれほど恐ろしい人なのだろうかと思つていた。

クロエがあれほど繰り返して主人公に言い聞かせてくれたし、クロエ以外からも、いい話は聞かなかつたからだ。

だが、いざ対面した彼女は、単にコミュニケーションが不得手なだけの、ごくふつうの女性に見える。

そう思つたら、彼女がちよつと要領を得ない話をしてくるとか、ずいぶんと話が飛びまくるとか。

そういつた事は、ごく些細な事に思えて……。

それどころか、

——なんだ、この人。全然とつつきにくくなんてないじやない。

と安心してしまつたのだ。

●正面 50センチ

「少し自信なさそうに、少し歯切れ悪く。

主人公の事を、ミネルヴァなりに最大限気遣つて いる様子で。

ミネルヴァとしては、この提案こそが最善だと思っている。

だが、それが主人公に承認されるかというと、そうは思えないでの。

『職業斡旋所のお嬢さん』とはクロエの事】

先程の面接でもお話を通り。

また……職業斡旋所のお嬢さんからも聞いているかも知れなけれど。私の技術は少し変わっている。

これから貴方に施す予定の術は、まだ、他の誰にも試した事がないし……。少し特殊すぎて……それを嫌がる人もいる事をわかっている。

決して、無理強いはできないわ。

【一呼吸おいてから。

淡淡と、だが真面目なトーンになつて。

これは真剣に伝えなくてはならない事なので。

だが『他の治療法』は時間がかかるのに加えて、確実性に若干欠ける。

なのでできれば『これから貴方に施す予定の術』で治療したいと思つてはいるので時間はかかるけれど……他の治療法もある。

【さらにワントーン、真面目さが増す。

これは最も真剣に伝えなくてはならない事なので】

……だから、どうするか。

貴方に決めてほしいの。
とても重要な事だから」

「主人公」

「……わかりました」

●正面 50センチ

「少し意外そうに。

主人公の返答が、予想以上に早かったので

え？」

だから主人公は、気づけばすんなり了承していた。
自分でも、

……まあ、少々即決が過ぎるかしら。

とは思つた。

だが、ミネルヴァが真剣に話してくれている事だけはわかつた。

だから、これ以上彼女の苦悩を長引かせたくない。

自分もまた彼女の行動に、できるだけ早く、かつ誠実に応えたいと思つたのだ。

S E 5　主人公が身体を動かす音 2

【最初から最後まで流す】

主人公、どうにか身体を起こすと、ミネルヴァの顔がちゃんと見えるよう、頭を軽く斜めに傾ける。

それから、覗き込むようにしてこう言つた。

△主人公△

「お願いします。どうかわたしに、その治療法をお試しいただけませんか。

……早く、あなたのお役に立ちたいのです」

それは、主人公としては、笑顔で穏やかに、余裕のある感じで言つたつもりだった。だが、実際は顔色は最悪、声はかなり努力しないと聞き取れないほどの大きさで、とてもそうとは言えない状態だった。

それでも主人公は『自分は話を正しく聞いて理解し、納得した上でこう言つている』と

いう事を伝えたかった。

そうでなければ、ミネルヴァはまたあの申し訳なさそうな表情を浮かべるだろう。
それだけは避けたかったからだ。

●正面 50センチ

「【※息遣い※】のみで表現する。

感動と驚きで息をのむ。

まさか、主人公がそう言ってくれるとは思っていなかつたので

……！」

こうして主人公は二十二年間の人生で染みついたお姉ちゃん的な行動、そして余裕あるふり演技を無意識のうちにを行い、この世界における彼女の運命は、ミネルヴァと生きる方の道へ大きく舵を取つた。

それにしても、喉はいまだまつたくだめだ。

息をするたびにひゅーひゅーと妙な音を立てるくせに、肝心の事はちつともまともに発声させてくれやしない。

そんな身体に鞭打つて、主人公は続ける。

（主人公）

「ミネルヴァさん。

……つ、ごめんなさい、少し聞き苦しいかもしないのですが」

●正面 50センチ

「優しく、だが真剣に続きを促す。

それがどんな内容であれ、主人公の言葉を聞きたいと強く思っているので】
ええ。勿論聞くわ。

貴方の気持ちを聞かせて】

（主人公）

「来るなり……ご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありません。

それなのに、こんなお気遣いをいただいて。

……つ、わたしは、とても、感謝、しています」

●正面 50センチ

「※息遣い※ のみで表現する。

主人公がこれから何を言おうとしているのかを、一つとして聞き漏らすまいと、真剣に

聞いている】

……

なんとか話そうとする主人公を、ミネルヴァが心配そうに見ている。

その姿は、噂に聞いていたような不気味で恐ろしい女性にはとても思えない。

もちろん主人公は、クロエや、他の人々の主張が完全に間違っていたとも思っていない。確かにミネルヴァは、多分に、相當に誤解されやすい言動をしているようを感じられる。だからおそらく、過去、言葉が足りない事によるささいな行き違いがあつて。

それに尾ひれや背びれがついた結果、クロエが聞いたような話をささやかれるようになつてしまつた……。などといった感じの事があつたのではないだろうか。

と、推測できるからだ。

もちろん、まだ確証は持てない。

だが、少なくともそういう想像ができる程度には……主人公はミネルヴァの人柄を理解できた気がして。

……なんだかそういうのって、わたしにも身に覚えがある氣がするわ。

と、思ったのだ。

「主人公」

「……だから、わたしこそ、お願いします。

あなたの方針に従います。

……どうか、わたしを治療していただけませんか」

だから主人公はこう言つた。

自分なりに最善と判断した上で、彼女の申し出に応じる事にした。

●正面 50センチ

「〔※息遣い※ のみで表現する。

※あまり大げさにはならないようにお願いします※

驚きと嬉しさで息をのむ。

主人公が治療について了承してくれただけでなく、自分を信頼しているかのような言葉をかけてくれたので。

それはとても信じられない反応だったので】

……！』

するとその時、ミネルヴァが、なぜだか泣きそうな顔をした。

出会った時から、話し方も表情もまるで一定、一律、一本調子。とにかく感情の読み取れない女性だと思っていたが、どうやら心は当然あつて、主人公がそれを見つけられていなかつただけらしい。

だから主人公は、己こそこれから看病される身なのに。

『彼女の肩を、優しく撫でてあげたい』『わたしは大丈夫だから、もうそんな顔をしないでほしい』と思つた。

つまりミネルヴァは、最初から主人公にとつて、妙に母性をくすぐる存在だつた。

まだ本人には確認していないからわからないうが――おそらくミネルヴァは妹か、一人っ子的存在であるに違ひない。

●正面 50センチ

「かすかに微笑むように。

どこかホツとした様子で。

主人公の今の発言についてと、主人公に対してもこれまでに抱いた印象を述べる。

ミネルヴァは今の主人公の言葉で、すっかり主人公を信頼してしまつた。

というか、もう、すっかり主人公を好きになつてしまつた。

『絶対に治す。絶対に信頼に応えるわ。そして、この方と一緒に研究を頑張るの……！』

というテンションになつてゐる。

だが、好きという感情には無自覚である。『だけど、その前に治療を成功させなくっちゃ』
という冷静な自分が、高ぶる感情にストップバーをかけているので】

……ふふ。

……ありがとう。

【少し間を開けてから。

大きな喜びを抑えつつ、とても嬉しくなつてている感じで】
うん。

【少し間を開けてから。

一行ずつゆっくり目に。

主人公に対して、これまでに抱いた印象を思い出している感じで】
そうね。

貴方はきっと、そう言うんじやないかなつて思つていた。

貴方が眠つてゐる時。

【一行前の補足として言つてゐる】

容態を見た時に感じたの。

貴方はきっと、強い女性なのでしそうつて。

【少し真剣なトーンになつて。

ミネルヴァは主人公のこういった側面を、心から尊敬しているので

……本当は耐えがたい位（くらい）の事を、食いしばって。

『もう一步』『後少し』って我慢していたから、ここまで症状を進行させてしまったのだ
ろうって。

【少し間をあけてから。

さらにもう一段階、少し真剣なトーンになつて。

ミネルヴァは主人公へのこの気持ちを、ぜひ伝えたいと思つていたので。

最後の行でとても重要な事を言つているが、さらりと流し、特に補足もしない。
ミネルヴァは感動と使命感のあまり、またもや説明不足になつてゐるので

そんな貴方を、私は尊敬する。

『すごい』って、思つてる。

だから、助けさせてほしいの。

……私がこの身体になつたのは、この為だつたとわかつたから

〔主人公〕

〔……？〕

だけど、ミネルヴァにとびきり優しい言葉をかけてもらいながら。

主人公は『その解釈は少し違う』と思つていた。

どちらかというと、主人公は、単に自分に対して鈍かつたのだ。
だつて主人公は

『こんな事を苦しいと思つていてはダメ』

『わたしは平氣だ』

そう思つていたから、結果的に『耐えられて』しまつた。

それだけ。それだけなのだと。

△主人公△

「……つ……」

そう思うのに、胸にじんと熱いものが染みる。

理由はちつともわからぬ。

まるでピンとこない事を言われているのに、それでも、なぜか嬉しかつた。
そのまま『その通りだ』と肯定して。抱きつきたくなるほどに嬉しかつたのだ。
もちろん、実際にはそんな事はしない。

だけど……主人公は少し泣きそうになつっていた。

ミネルヴァ、『正面15センチ』の距離まで近づいて『無聲音ささやき』をする。

●正面 15センチ 『無聲音』ささやき ※マークのセリフまでささやく
「そっとささやく。

本人にそのつもりはないが、どこかセクシーな展開を期待させるようなイメージで】
目を閉じて』※

するとそこへ、ミネルヴァがふと近づく。

だから主人公は、まずは熱でも測るのかしら、と考えた。
確かにそれは、治療の一歩だ。

ゆえにおとなしく従い、主人公はいまだ疲労で熱い目をそっと閉じる。
そのまま、ミネルヴァの気配が近づいて。花のようないいにおいがふわりと漂つて。
だから、

ああ、妖精みたいな人は、髪のにおいも森の草花みたいな、優しい匂いなのね……。

と思つていると。

顎を軽く持ち上げられたような感覚の後——主人公の唇に、柔らかいものが触れた。

S E 6 ミネルヴァが近づく音

【最初から最後まで流す】

●正面 0 センチ

「〔※1回※ キスする。

軽く唇が触れるだけのキス】

ちゅ」

え?

今のつて……。

そう思つた時には、生まれて初めてのキスが終わっていた。

もし。もしこの光景を主人公の知り合いが見ていたら。『研究一筋の女だと思つていたのに、とんだ遊び人になってしまったものだ』と嘆いたかもしれない。

そして普段の主人公であれば、それを『そんなはずがないでしょう！』と必死に反論し、慌ててミネルヴァから離れた事だろう。

だけど今、主人公は不思議と嫌ではなかつた。

仮に誰かに何か言われたとしても、特に気にせず、ただこの行為を受け入れ続けただろう。

それはやはり、疫病に浮かされていたからかもしれないし——落ちに落ちてたどり着いたここが、自分の知る世界とは、まるで違う法則でまわる場所だったからなのかもしれない。

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離で『無聲音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無聲音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しくささやく。

本人にそのつもりはなく、純粋に優しい声で言う事で、主人公を安心させようとしている。

だが、どこかセクシーな展開を期待させるようなイメージで】

大丈夫。

どうか心配しないで。

きつと……気持ちいいから』※

脳にじわっとろけるような静かな声が、そつと主人公にささやきかける。
それを聞きながら、主人公は思う。

……そういえば。

『きつと』って一体どういう事なのか、お聞きするのを忘れていたわ。
それでも、気持ち悪いとか、痛いとかよりは、ましだと思つてよさそうかしら……？

と。

●正面 0センチ

「【※1回※ キスする。

軽く唇が触れるだけのキス】

……ちゅー

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離で『無聲音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しくささやく。

本人にそのつもりはなく、純粹に優しい声で言う事で、主人公を安心させようとしている。

だが、どこかセクシーな展開を期待させるようなイメージで

今は、私に任せて頂戴」※

そんな事を思いながら、主人公はまた目を閉じる。

そうするのが最も自然で、最もよいと——身体が言っている気がしたからだ。

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離で話す。

●正面 0センチ

「優しく、淡々と。

淡々としているが、どこか頼りがいのある雰囲気で。

主人公の了承のおかげで、ミネルヴァは自信を取り戻せたので。

なので、内心ホッとして、精神が安定したので。

しかしそれでも絶対に油断せず、真剣に治療しようと思つてゐる】

……それでは、治療を始めます。

西の魔女の名にかけて、必ず貴方を治しましよう

ここでフェードアウトして終了。